

国際理解の意識の芽生えを培う手遊び歌の有用性

—幼児教育における手遊び歌『グーチョキパーでなにつくろう』に焦点をあてて—

The usefulness of hand-play songs in cultivating a sense of international understanding

- Focusing on hand play song "What to make with *Rock, paper, scissors*" in early childhood education -

安江真由美¹、松井裕樹²、松永洋介³

YASUE Mayumi¹, MATSUI Hiroki², MATSUNAGA Yosuke³

[キーワード Keyword] 幼児教育、幼稚園、国際化教育、手遊び歌、国際理解の意識の芽生え、国際バカロレア、IB、PYP
[所属 Institution] ¹岐阜大学教育推進・学生支援機構、²岐阜大学非常勤講師、³岐阜大学教育学部

[要 旨 Abstract] 国際バカロレア(IB)教育において初等教育課程であるPYPは3歳から12歳までの広い範囲をカバーしている。中でも3歳から6歳までは義務教育ではないこともあり、これまで実践例が少なかった。しかし、IBの使命である「多様な文化の理解と尊重」を実現するためには幼児教育からの積み上げが必要である。そこで筆者らは手遊び歌に着目し、遊びから育まれるその教育的な可能性を実践調査をもとに探ることにした。その結果、園児が夢中になっていた『グーチョキパーでなにつくろう』の手遊び歌には、①短く覚えやすい旋律と構成、②思考力を働かせる表現や展開と新規性の創造、③幼児らが興味や関心を抱きやすいキーワードの3つの条件があることが解明された。また、この手遊び歌の楽曲分析の結果、音楽的な側面からもその有効性が確認された。さらに、国外においても同曲が母国語や英語で親しまれている場面が検証された。これらを総合して検討した結果、手遊び歌『グーチョキパーでなにつくろう』は国際理解をねらいとした教育に適していると考えられた。また、手遊び歌についても同様に有効ではないかという仮説を得ることができた。

1.0.はじめに

1.1. 問題の所在と研究の目的

筆者らはこれまで国際バカロレア (IB : International Baccalaureate) の研究に取り組んできた。IBは3つの教育課程、すなわち3-12歳を対象としたPYP (Primary Years Programme)、11-16歳を対象としたMYP (Middle Years Programme)、16-19歳を対象としたDP (Diploma Programme) とIBCP (Career-related Programme)である。なおDPは大学進学課程であり、IBCPは大学進学者を対象としない課程である。この中でPYPは、日本の教育課程では幼稚園から小学校まで9年間に及んでいる一方で、これまで幼稚園を対象としたIBの研究については十分取り組んできたとは言えなかった。

しかしながら中央教育審議会 (2021) は、幼児教育の質の向上について、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、個々の教職員が幼児と直接関わりながら、幼児教育に関わる全ての者と連携・協力し、質の向上に一層取り組む必要¹があると示している。このことを踏まえて、個々の教職員や保護者、関係・関連の者等が幼児と直接関わりながら、幼児教育に関わる全ての関係者や諸機関と連携・協力し、子どもの育ちを支えるためにはどうしたらよいかについて考える必要が出てきた。

他方、現行の幼稚園教育要領解説の領域「環境」では、新たに「国際理解の意識の芽生え」等²が養わ

¹ 中央教育審議会 (2020) 関係部会等における取りまとめ (3/6) 【幼児教育の質の向上について (中間報告)】 https://www.mext.go.jp/content/20210312-mxt_syoto02-000012321_4.pdf (2023.9.4閲覧)

² 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 p.9

れるようにする旨が示されている。そこでは将来の国民としての情操や意識の芽生えを培う上で、例えば、幼児は古くから親しまれてきた唱歌、わらべうたの楽しさを味わうことや、様々な国や地域の食に触れる等、異なる文化に触れること等を通して文化や伝統に親しみをもつようになる³と示されている。そして、このような活動を行う際には、文化や伝統に関係する地域の人材、資料館や博物館等との連携・協力を通じて、異なる文化にも触れながら幼児の体験が豊かになることが大切⁴とされている。この内容を受けて、前段階として、園において幼児の国際理解に関する関心を喚起するにはどうしたらよいのだろうか、そしてそれはIBの理念にも対応するはずである。またPYPとしての教育でも行えるものとなると考えられる。

このような問題意識の下、その解決策として、幼児が日頃から慣れ親しんでいる遊びの中で、教職員や友人、家族らと直接関わりながら多様な学びを得られる手遊び歌にその糸口を求めることにした。具体的には、幼稚園における実践・調査と考察を通し、①国際理解の意識喚起につながるための手がかりとして手遊び歌とその活用について知見を蓄積する、②日本人としてのアイデンティティを培いながら養う国際理解への芽生えの検証、③幼稚園におけるPYPの可能性へとつなげたい。そこで本論文では、国際理解の意識の芽生えを養う上で特に効果的な手遊び歌とその活用について検討し、考察することとした。

1.2. 先行研究と研究の方法

手遊び歌について、今・尾辻は、幼稚園における手遊びの有用性と5領域との関連について、以下4点を指摘している。すなわち、①幼児にとって楽しく、興味を惹き活動であるということ、②指先を使うことで知能の発達に有効であること、③集団活動時の導入として効果的であること、④幼児と生活・季節との関わり点である。また、手遊びは5領域の全てに関連していることを明示し、保育者が手遊び歌の内容を分析し、意図して保育に用いることによって、5領域の目標の達成の一助となることも示唆した。その中で手遊び歌は単に幼児を惹きつけるだけの教材にとどまらず、保育者の教材研究や保育計画によって教育的効果を一層高められることを示している⁵。

一方、国際化を図るための手遊び歌に関する研究として、横井・本山らによってオーストラリアの幼稚園で幼児に親しまれている手遊び歌が譜例と共にまとめられ報告されている⁶が、その他には管見の限り見当たらない。

そこで本論文においては、先行研究における報告や指摘を踏まえた上で実践を行い、手遊び歌の有用性について考察を行う。実践では、現在幼児教育において広く親しまれていると考えられる手遊び歌を取り挙げた。この場合の手遊び歌については、手や指を用いながら楽曲にのせて歌う曲及び手遊びを便宜的に手遊び歌と述べる。また、日本国外における手遊び歌の概念については問題として扱わない。

2.0. 手遊び歌

2.1. 手遊び歌の意義

幼児は、遊びや生活の中で外的世界と出会い、自分の内的世界を更新していく。遊びや生活から養われる内容は、個人的な発見等により育まれるものもあれば、保育者や友人、保護者等との人的環境との関わり

³ 文部科学省 (2018) 前掲書、p.211

⁴ 同上書、p.211

⁵ 今由佳里・尾辻菜摘子 (2021) 「幼稚園における手遊び歌に関する実践的研究：「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」領域との関連」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』72巻、pp.29-48

⁶ 横井一之・本山ひふみ他 (2006) 「5つのオーストラリアの手遊び」『鈴鹿国際大学短期大学部紀要』26、pp.25-33

りの中から生まれるものも多い。さて、子どもの遊びの中には手遊び歌がある。手遊び歌を通して幼児は、リズム感や俊敏性の育成、創造性の育成、人間関係の構築、意思の伝達、脳への刺激等を養う。つまり、手遊び歌は遊びや生活と密接に関わるものだといえる。しかも手遊び歌は、個だけでなく、多様な集団においても主体的かつ協働的に取り組み、創造していくことができる。つまり、手遊び歌は、あらゆる可能性を秘めた知的な遊びであるといえよう。

2.2. 実践調査

本研究においては、実践研究として、愛知県A幼稚園の年中児かぜ組に実施した手遊び歌の分析等を記す。本論文において実践を採りあげることについて、実践対象の園から承諾を得ている。この実践は、2022年6月9日から6月24日にかけて実施したものである。なお、実践にあたっては日頃より、様々な種類の手遊び歌に取り組んでおり、手遊び歌に親しみを抱いている組で実施した。

まず実践したそれぞれの手遊び歌について、保育者の援助と実践対象組の様子の見取り、分析を下記に示す。分析の視点については、(A) 保育者の援助、(B) 園児の様子、(C) その後の活動への心身の体制づくりとした。なぜなら、園児の内なるものとして息づく教材の有用性について、人的環境の側面から検討するからである。また、(B) 園児らの様子については抽出児としてA児を対象とした。なお、実践にあたって採り上げた手遊び歌は、多くの園において実施され、親しまれていると考えられるものとした。

2.2.1 手遊び歌『おべんとうばこのうた』

- (A) 保育者の援助：園児の実態を踏まえ、通常よりも遅いテンポで、誘導するように手遊び歌をする。かぜ組全体に伝わりやすいよう、大きな声かつゆっくりはっきりとした発声や分かりやすい動作で行った。
- (B) かぜ組全体の様子：既知の手遊び歌であったが、長い手遊び歌であるからか、集中力が途切れる園児も出てきていた。一方で、終始見よう見まねで口や手を動かしている園児もいた。ただ、園児によっては、手の動き等が難しいようで、自分で考えた動きをリズムよくテンポよく行っていた。
- 〔抽出女児A：懸命に保育者の動きを見て、模倣するときもあれば、視線を外して自分で考えた動きをするときもあった。最後の「すじのとおったふき」のところは、自信をもって楽しげに表現していた。なお、抽出女児Aにとっての有効性は、模倣したり、記憶したり、創造したりと様々な汎用的能力を育成すること、また、曲の長さに慣れることと考えられる。〕
- (C) その後の活動への心身の体制づくり：手遊び歌において、1回目は大胆、2回目は繊細な表現で手遊びを実施した。その後、絵本を聞く際には、手遊び歌で集中力を使い果たしたからか、数人頭を動かす動作が見られた。

2.2.2 手遊び歌『さかながはねて』

- (A) 保育者の援助：園児らが覚えやすいように、大きな身振り手振りや、子音を立てながら母音もたっぷりと遅めに発声した。
- (B) かぜ組全体の様子：既知の手遊び歌であったが、短く覚えやすいフレーズ等であるため、繰り返されるたびに、声や動作が大きくなっていった。保育者が考える最後のフレーズが身近なものであったこともあり、嬉々として模倣する様子が多々見取れた。
- 〔抽出女児A：2回目から、手をはじめとした身体の動きが大きくなり、歌詞も口をはっきりと動かして伸び伸びと歌っているようであった。なお、抽出女児Aにとっての有効性は、模倣の末、記憶した手遊び歌を自信をもって、楽しみながら堂々かつ伸び伸びと表現することである。〕
- (C) その後の活動への心身の体制づくり：手遊び歌の最後のフレーズで保育者が示した、ぼうしやめがね、マスク等をつけるポーズを思い切り楽しんだ後だったこともあり、その後の絵本の時間では、絵本と一体になっているかのように、園児が親しみを持って聞いている様子が垣間見えた。

2.2.3 手遊び歌『コンコンきつね』

(A) 保育者の援助：園児らが興味を抱くように、歌詞のきつねの部分をピカチュウに変えて、実施した。また、園児らが模倣しやすいように、ゆっくり大きな声かつ身振り手振りも大胆に行った。

(B) かぜ組全体の様子：興味のあるピカチュウの手遊び歌ということで、保育者の動きを覚えようと一生懸命模倣する園児が多かった。また、旋律は『しあわせなら手をたたこう』とほぼ同様かつタツカのリズムが効果的に用いられている曲である。対象の発達段階の幼児らは比較的旋律・リズム等を覚えやすそうで、段々と声が揃っていった。おそらく幼児はおおむね4歳児ごろからギャロップやスキップに取り組むため、そういった動きのリズムと結びつけたり慣れたりしているのであろう。さらに、フレーズのはじめの音以降は音が順次に上がっていくことから、気持ちの盛り上がり音を音と共に表現する園児も見られた。

〔抽出女児A：音楽そのものには乗ってはいしたが、手遊び歌を小さく口ずさむ程度であった。一方で、ピカチュウの歌詞のみ、口を大きく動かして声を出し、楽しそうにしていた。なお、抽出女児Aにとっての有効性は、リズム等が含まれる音楽そのものを楽しむこと、自分の好きという気持ちを大切に思い切り表現することの大切さを学ぶことと推測する。〕

(C) その後の活動への心身の体制づくり：集中して模倣し、各々が好きと感じるピカチュウを大切にしてお手遊び歌をした後だったこともあり、そのまま穏やかな空気感を維持して次の絵本の活動に取り組み始めた。

2.2.4 手遊び歌『ぼうがいつぼん』

(A) 保育者の援助：園児らが理解し、反応しやすいように、ゆっくりかつはっきりと歌を歌ったり、大胆に動いたり、問いかけを行ったりした。問いかけの内容は、「頭はどこだ」や、「おへそはどこだ」等、園児の身体に関するものとしていた。

(B) かぜ組全体の様子：短く覚えやすい旋律、かつ思考力を働かせる参加型の手遊び歌であることから、全員が笑顔でまとまりのある声を出していた。また、真剣な表情で保育者の問いかけに真摯に反応しながら手遊び歌を続けていた。音楽の構造が整理されているため、園児らの安心感につながったようで、落ち着きながらも楽しみながら、活動に参加していた。

〔抽出女児A：時々保育者から視線を外すものの、手遊び歌に集中して取り組み、保育者の問いかけにも真剣に答えていた。なお、抽出女児Aにとっての有効性は、理解しやすく取り組みやすい音楽の中で、集中力を高めながら、音楽等に主体的に反応する能力を養えることと考える。〕

(C) その後の活動への心身の体制づくり：対話型かつ参加型の手遊び歌ということで、短い手遊び歌の活動を存分に楽しんだ後であった。短い時間の中で皆が一様に集中していたことから、その後の絵本の活動への導入もスムーズで、絵本の活動自体も大変な盛り上がりを見せていた。

2.2.5 手遊び歌『グーチョキパーでなにつくろう』

(A) 保育者の援助：ゆったりとした大きな声かつ聞き取りやすくわかりやすい発声や動作で行った。全部で5回繰り返す中で、最後の2回は、園児に何の形を表現しているのか考えさせていた。考えさせる内容は、園児の生活の中にあるものであった。

(B) かぜ組全体の様子：保育者が歌い始めるとすぐに近寄り、大きな声かつはっきりとしたハンドサインで模倣し始めた。短く覚えやすい旋律や歌詞構成ということも影響し、次第に全員の声まとまっていた。また、音程も安定していた。最後の2回については、保育者が手の形を質問するスタイルにしたため、幼児は思考力を働かせて各自の内なるものと対話しつつ、創造的に考えている様子であった。その後、目を見開いて、生き生きとカタツムリやちょうちょう、アンパンマン、アイス等と答えていた。

〔抽出女児A：はじめは、模倣することに集中していたが、次第に慣れ、主体的に手を動かす様子が見受けられた。手のポーズを考えるとときには、口をパクパクと動かしながら、懸命に答えていた。5回に渡

って視点が定まって楽しげに動いていたため、集中したり熱中したりしていると見取れた。なお、抽出女児Aにとっての有効性は、能動的に活動する力や模倣する力等の汎用的な能力の向上に加えて、安心感に包まれながら音楽そのものを楽しみながら、表現することと考えられる。]

(C) その後の活動への心身の体制づくり：皆で声を合わせて歌い、また最後の2回は思考力を働かせて手の形を考えて遊んだ後ということで、落ち着きつつもモチベーションを上げたまま、絵本の活動に入る様子が見られた。

2.3. 園児にとって最善と考えられる手遊び歌

2.2において、園児らが楽しみ、集中し、次の活動への導入等がスムーズだったものには、共通点が見いだせる。すなわち、①短く覚えやすい旋律と構成、②思考力を働かせる表現や展開と新規性の創造、③幼児らが興味や関心を抱きやすいキーワードがあることの3点である。

3.0. 2.0を踏まえた手遊び歌の可能性

幼児教育は、人間的成長や発達を基軸として営まれる。手遊び歌をはじめとする表現の活動は、人間関係や環境、言葉、健康といった活動と相互に関係しながら、幼児が心身ともに伸びやかに成長するように、計画することが大切である。つまり、人間的成長や発達は、前述した5つの領域である表現、人間関係、環境、言葉、健康の5つの領域から、時間帯や場所、人間関係等を考慮して、育むことで一層の高まりをみせる。

かぜ組全体の反応が総じて良く、かつ抽出園児Aが集中して手遊び歌を行っていたと推察できる手遊び歌は、2.2.5に示した『グーチョキパーでなにつくろう』であった。この手遊び歌を通して、培われる可能性について言及する。

展開の工夫により、個・多様な集団を問わず取り組める。そのため、自分との対話という意味で個、他者との協働・共修という意味で集団でも遊ぶことができる。また、他国においても、この曲を活用しているところが多い。この曲の原曲は、17世紀ごろから伝わるフランス民謡『Frère Jacques (フレールジャック)』であり、様々な国で親しまれている。例えば日本では、斉藤二三子が作詞した『グーチョキパーでなにつくろう』のほかに、水田詩仙が歌をのせた『サンタクロース』、芙龍明子が記した『おはよう・行進・さよなら』、勝承夫による『かねがなる』等の歌詞が主に挙げられる⁶。また、英語圏においてこの曲は、『Are You Sleeping』や『Rock, scissors, paper』と題されている。さらに、ドイツでは、『Bruder Jakob』、ロシアでは、『Брат Иван』⁹、中国では、『两只老虎』等、国外でも親しまれている。

3.1. 楽曲について

ここでは、手遊び歌『グーチョキパーでなにつくろう』について、旋律や歌詞に着目し、この曲の特徴を概観する。ここで述べる簡単な分析を通して、この曲が世代を超えて多くの人に親しまれている理由を考察する。なお、分析に当たっては『続こどものうた200』に掲載されている楽譜を参照した⁷。なお、多くの楽譜が3番の歌詞のみ示していることに対し、この文献の譜は、1・2・3番の歌詞を採用している。

この曲は、第1小節における音型（譜例1）と第3小節における音型（譜例2）が組み合わせられて構成されていると考えられる。

⁷ 小林美実編（2020）『続こどものうた200』株式会社チャイルド社、p.64



譜例1『グーチョキパーでなにつくろう』第1小節 譜例2『グーチョキパーでなにつくろう』第3小節

次いで第5小節は、第1小節目の音型の第1・2拍目が変化したものとして考えることができる。したがって本曲全体としては、この2つの音型を基にした旋律の動きのみで構成された単純な楽曲と見ることができる。

この曲は旋律の動き自体も複雑ではないため、Iの和音だけでも伴奏が可能である。つまり、曲の構成と旋律の動きはどちらも単純な仕組みとなっており、気軽に歌える曲であるといえる。

歌詞については、第1・2小節、第3・4小節で、それぞれ先行する小節の歌詞が次の小節で模倣的に繰り返される構成となっている。また、第5・6小節以降については若干の差があるために完全に同じ歌詞の繰り返しとはいえないが、構造としては模倣的な繰り返しとしてとらえて問題ないであろう。したがってこの曲の歌詞は対話的であり、大勢で楽しむことができる曲であるといえる。先行する小節を保育者や親が歌い、その後を幼児が歌ったり幼児同士で歌いあったり、また自己対話的に一人で遊びこんだりすることが可能で、様々なバリエーションが楽しめる。

さらに歌詞の内容自体も変更が可能で、歌う側が様々な歌詞を考えることができる点も特徴である。具体的には、第5・6小節目では、左右それぞれの手で「グー」「チョキ」「パー」のどの形を選ぶか、第7・8小節目ではそれらの組み合わせによって成立する物の名前をそれぞれ歌い手が考えることができる。したがって、楽譜の中で特に指示はないが、第5・6小節のテンポを少しゆっくりして歌う表現方法も見られる。この部分を少しゆっくりと歌うことによって、ハンドサインで何が作られるかという期待感が強まり、対話的な手遊びがさらに楽しくなるといえる。

加えてこの曲は、構造的には単純であるため覚えやすい。それにも関わらず、歌い手が歌詞の内容を自由に考えることができる部分があるため様々な版を考えることができ、飽きのこない楽曲であるといえる。さらに、歌詞の内容によってテンポを工夫することも可能であり、音楽表現も楽しむことができる。また、楽曲の構造とは関係がないが、用いられるハンドサインも3種類と単純で、特に動かしにくい動作を必要としない点も特筆すべき点であろう。

これらの点が、この曲が幼児教育で普遍的に用いられていると同時に、多くの人に親しまれる要因の一つであると考えられる。

3.2. 活動のバリエーション

『グーチョキパーでなにつくろう』は、国内外問わず、多くの世代におけるコミュニケーションツールになり得ると考える。その理由を次に述べる。

①国内における活用

この手遊び歌を通して時間帯や場所、人間関係等を考慮の上、様々な汎用的能力や知識・技能を育むことができる。

例えば、時間帯を軸に検討するのならば、何かの活動をする前に導入としたり気持ちを切り替える手立てとしたり等、季節や発達段階を問わずあらゆる場面で活用できる。また、場所を軸に考えるのであれ

ば、天候に関わらず屋外や教室、活用次第では生活発表会や音楽発表会、運動会、お泊まり会等の行事の時にも実施できる。さらに、人間関係を軸に勘案するのならば、自分と対話しながら一人で、仲の良い友人と二人から少人数等だけでなく、この曲を仲立ちに不安定な関係の友人らとの人間関係の修復にも取り組める。加えて、少人数からクラス全体、異年齢構成、園全体、保護者参観日や敬老会等、いろいろな時や場で行うことが可能である。また、同じ園にいる言葉で交流することが困難と考えられる様々な状況下にいる幼児とも対象の手遊び歌を通して心を通わせることも可能である。さらには、他の園や他県等の子どもたちとの交流や、異年齢学習の導入時、敬老会・介護施設等におけるボランティア活動等においても活用できる。

以上を考慮の上、遊びの中で培われていくと予想される汎用的能力としては、認識力・創造力・想像力・主体性・協同性・共同性・思考力・実行力・働きかけ力・発信力・傾聴力・規律性・柔軟性・状況把握力等やそれらの芽生えが挙げられる。

次いで、知識・技能の側面から考える。知識としては、グーチョキパーから表現する様々な動物・乗り物・食べ物・図形・虫・物・天気・季節の事柄等の名称が覚えられる。例えば、自国のアイデンティティを養う手立てとして、両手パーで力士の表現をすることは、日本の伝統文化の学びも遊びの中で修得できるということである。一方、技能としては、楽曲全体を通して、指や手を動かすことが習慣となることに加えて、グーチョキパーから繰り出される多くの物事事象等を表現、そして、音程や言葉を示すことができるようになり、発声・リズム感・拍感等も同時に養われることが想定できる。

②国外における検証

3.0 に示した通り、『グーチョキパーでなにつくろう』の旋律は、様々なバージョンで国外においても活用されているため、他国の人々との交流においても、言葉が通じなくとも心をつなぐことができる。

例えば2023年8月27日～9月1日の時点で、フィリピン共和国の南部ミンダナオ島ダバオ地方の年長児を含む Catalunan Pequeno Elementary School や、**DAVAO CITY SPECIAL SCHOOL MATATAG**、**TALOMO CENTRAL ELEMENTARY SCHOOL** の3校においては、日本における『グーチョキパーでなにつくろう』と同様の旋律の手遊び歌をタガログ語と英語で行っていた。そこでは、旋律という共通言語で子どもたち同士だけでなく、大人も心を通わせる場面があった。具体的には、言語の壁があったとしても、共通の言語である音や音楽の中の旋律を唱えることで意思疎通を図っていた。また、手遊び歌の身体表現は言語ごとに様々であっても身振り手振りを模倣することで、共に笑顔になっていた。さらに、タガログ語における同一旋律・身体表現であっても、英語のそれであっても、言語で壁を作らないように、働きかけたり、見様見真似で他国の歌詞も模倣しながらできるようにしたりして、時を共に紡ぐ姿が垣間見られた。音・音楽を介して、異なる国の人と人、同一国の異年齢の人々が心をつなごうとしていた瞬間であった。これは、各々の国の環境等を示す内容を含む遊び方、言語といった自国のアイデンティティを大切にしながら遊びの中で国際理解に努めようとしていた時間と解釈する。この一連の流れが音・音楽の中の1つである手遊び歌をきっかけに国際理解の意識を芽生えさせる手掛かりとなると推察した。

以上から、幼児の周りの人的・物的環境の構成次第で『グーチョキパーでなにつくろう』を通して国際化の意識を芽生えさせることが可能であると考えられる。

4. 結論

本論においては、国際理解の意識の芽生えを培う手遊び歌について、実践調査をもとに、特に園児の心をつかみ、効果的と考えられるものを抽出し、その根拠を紐解き、考察した。

実践調査の結果、多くの園児が無理なく取り組むことができ、楽しめており、かつ次の活動への導入等がスムーズだった手遊び歌には、共通点があることが判明した。すなわち、①短く覚えやすい旋律と構成、②思考力を働かせる表現や展開と新規性の創造、③幼児が興味や関心を抱きやすいキーワードがあることの3点であった。

特に園児の反応がよいと感じられた『グーチョキパーでなにつくろう』には、上記の共通点がみられた。さらに研究を深めた結果、園児にとって親しみやすい音楽の要素・仕組みがちりばめられていることが明らかとなった。加えて、記憶に残りやすく再現性が高いことも園児が無理なく楽しめる一因となっていると考えた。特筆すべきことは、この教材は、他国においても同一の旋律が子どもへの教育等で活用されている。特に、歌詞や身体表現を個や集団、目的に応じて各々の裁量で工夫できることは、子どもにとって創造性を発揮でき、飽きずに遊ぶことのできる要因であると推測する。つまり遊びこむことができ、かつ創造・想像をひろげ、多様な展開が見込める教材である。

他国を含めたあらゆる環境において、手遊び歌『グーチョキパーでなにつくろう』は、各自の内なるものと対話しながら遊びの中で多様な学びが得られるとともに、音楽のコミュニケーションツールとして多様な環境かつ年齢の人々とつながることができること、自国以外の言語的・非言語的な文化も認識できる展開が期待できることが明示できた。つまり、手遊び歌『グーチョキパーでなにつくろう』は、子どもの中に息づく生きた教材である。ただし、生きた教材とするには、周りの大人が子どもの育ちを支えるために効果的と考えられる環境を人的・物的に設定することが重要と考える。この過程で幼稚園教育要領解説(2018)に示され、1.1において記した、他の地域等に人的物的環境の構成として、協力を求めることも有効であると考えられる。

以上を踏まえ、今後の課題としては、『グーチョキパーでなにつくろう』の手遊び歌を通して、国際理解の意識の芽生えを培うことのできる人的・物的な環境について、指導世代・国境を越えた多様な教材の検討をすることである。

5. 手遊びとIBについて

IBでは、「探究(inquiry)」「行動(action)」「振り返り(reflection)」を学習のサイクルとして位置付けている。この中でIB学習の中核となる「探究」はIBプログラムにおいて、指導計画(written curriculum)、授業方法(taught curriculum)、評価計画(assessed curriculum)の中心に位置づけられている。ここで重視されていることは、子どもがすでにもっている知識や経験である。しかし年少の子どもにとって知識や経験はこれから獲得していくスタートの段階である。そのような場合でも、子どもが取り組むには対象への興味・関心が重要なポイントとなる。つまり「面白そうだ」「やってみたい」という気持

ちをいかに喚起するかが重要となる。それには「自分にもできそうだ」という気持ちを持つことが必要である。また、楽しくできるという点も見逃せない。このように考えた場合、手遊び歌はその条件を満たすことのできる素材であるといえる。

世界にはいろいろな手遊び歌がある。その中には旋律が共通していたり、変形したりして伝播している歌も多い。本稿で取り上げた『グーチョキパーでなにつくろう』もその一つである。この歌もまた、2.2において明らかになった条件、すなわち、①短く覚えやすい旋律と構成、②思考力を働かせる表現や展開と新規性の創造、③幼児らが興味や関心を抱きやすいキーワードがあることの3点を満たしている。このような歌を用いることは国際化と関連を図る上で有効なものとなる。それには2通りの方法が考えられる。

1つは今回のように、二国間以上で共通している手遊び歌を用いて、相手国の文化への理解を図ることである。例えば相手国の服装、食べ物、遊び等をビデオなどの映像を通して見ることで、自分達との共通点を見つけ出し、自国文化と外国文化とを比較する経験をさせることである。今回は幼児教育に焦点を絞っているので、相違点よりは共通点に目を向けさせることによって親近感を持たせることにことを期待している。もう1つは、実際に外国の子どもたちと交流することである。外国人労働者の来日のごく普通になり、地域社会に共存している現在、近隣に彼らの子弟も多く在住している。中には日本の幼児教育を受けていることも多い。そのような機会を捉えて実際に交流することで、相互理解が深まるのではないかと期待される。

【参考文献】

(1) 書籍等

- 阿部恵 (2016) 『たのしい手あそびうた』 株式会社ナツメ社
植田光子 (2016) 『手あそび百科』 ひかりのくに株式会社
神原雅之、鈴木恵津子 (2018) 『幼児のための音楽教育』 教育芸術社
教育芸術社 (2020) 『小学校の音楽3』 教育芸術社
小泉八重子 (2015) 『DVDのお手本つき 手あそび歌あそび』 新星出版社
国際バカロレア機構 (2014) 『国際バカロレア (IB) の教育とは?』 非営利教育財団国際バカロレア機構
小林美実編 (2020) 『続こどものうた 200』 株式会社チャイルド社
高御堂愛子 (2017) 『楽しい音楽表現』 圭文社
兵頭恵子 (2019) 『行事ことばがけハンドブック』 株式会社世界文化社

(2) インターネット

- 「アルソック」の歌の原曲は、フランスの子守歌「フレール・ジャック」 - 一音九九楽 (hatenablog.com)
<https://ducksfly.hatenablog.com/entry/frere-jacques> (2023.9.3 閲覧)
中国：『两只老虎』 <https://youtu.be/VkozV7PGw60?si=OFvPLGvIV71Db0aV> (2024.1.5 閲覧)
ドイツ：『Bruder Jakob』 <https://youtu.be/7vBjssGuKYk> (2024.1.5 閲覧)
<https://vollmond.online/lernen/kinderlieder> <https://youtu.be/jNhEFh1gHkE> (2024.1.5 閲覧)
童謡「グーチョキパーでなにつくろう」(フレールジャック) (mu-tech.org)

https://www.mu-tech.org/Traditional/Frere_Jacques.html (2023.9.3 閲覧)

フレール・ジャック 歌詞の意味・和訳 フランス民謡 (worldfolksong.com)

<https://www.worldfolksong.com/songbook/france/frere-jacques.html> (2023.9.3 閲覧)

Mama Lisa's World of Children and International Culture

<https://www.mamalisa.com/?t=hubeh> (2023.9.3 閲覧)

ロシア：『Брат Иван』 <https://yandex.com/video/preview/11927307940614972943>

<https://www.youtube.com/watch?v=zmnF1s9pORE> (2024.1.5 閲覧) ※露語に加えて、仏・英語含む

謝辞

今回の研究にあたり実践の場を提供していただいた愛知県A幼稚園の園長先生はじめ教職員及び園児の皆様には厚くお礼申し上げます。